

P1-027

中学生と高校生の喫煙に対する行動・認識の比較による防煙教育の検討

細野 恵子

旭川大学 保健福祉学部保健看護学科

【目的】

中学生と高校生の喫煙に対する行動と認識を比較し、年代の差による防煙教育の課題を検討した。

【方法】

調査対象者はA市内の中学・高校2年生とし、平成27年6月に自作の無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は喫煙に関する行動と認識(加濃式社会的ニコチン依存度調査票：KTSND、10項目、点数幅0～30点、高得点ほど受容的認識)。調査方法はA市内の中学・高校各5校を無作為抽出し、学校長に趣旨を説明し、承諾が得られた学校に調査票を持参し、配布は担任に依頼し留置法で回収した。分析は単純集計、KTSND得点・項目別の差を比較(Mann-WhitneyのU検定、 $p<.05$)した。倫理的配慮として、所属機関倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

協力の得られた中学・高校は各4校で、調査票配布数は中学：739部、高校：843部、有効回答は中学：361(48.9%)、高校：423(50.2%)。現喫煙者は中学0名・高校2名、過去喫煙経験者は中学1名・高校5名。喫煙経験者の初回喫煙年齢は中学10歳、高校12-16歳、きっかけは友人からの誘いが多かった。喫煙への認識(複数回答)は不快、健康に悪いが中学・高校ともに上位を占めた。喫煙の勧めには、直ちに断る(中学91%、高校89%)が最多で、喫煙に対する意識・行動に影響を与えたもの(複数回答)は学校の授業(中学43%、高校45%)、TV(中学56%、高校32%)が上位を占めた。防煙教育は積極的に勧めるべき(中学59%、高校48%)が最多であった。喫煙に対する認識：KTSND得点(平均値±SD)は中学 4.6 ± 3.9 点・高校 9.8 ± 5.1 点で、高校生が有意に高かった($p<.01$)。認知の歪みでは、KTSND項目別平均値「タバコの害の否定」中学0.8点・高校1.3点、「効用の過大評価」中学0.7点・高校1.4点、「喫煙可能な場所」中学0.7点・高校2.0点は他項目より高く、中学生より高校生の方が有意に高値($p<.01$)であった。

【考察】

対象地域における中学・高校の喫煙経験者は少ない傾向で、喫煙への不快感や健康被害等の否定的認識を示した。一方、KTSND得点は高校生が正常値9点よりも高値であり、認知の歪みも中学生より高校生の方が強く、喫煙に対する肯定的認識をもつ傾向が推測される。本調査結果より、防煙教育はより早期に導入することが重要であり、認知の歪みを是正する教育内容・方法の検討が必要と考える。

P1-028

思春期における眠気とライフスタイルおよび心理社会的行動との関係

宮川 幸代¹、武内 紗千¹、谷田 恵子¹、池田 雅則¹、片田 範子²、永井 利三郎³¹兵庫県立大学 看護学部、²兵庫県立大学、³プール学院大学 教育学部

【目的】

思春期における眠気とライフスタイルおよび心理社会的行動との関係を明らかにする。

【方法】

小学4年生から中学3年生までの思春期のこどもを対象とした横断研究を行った。調査期間は2015年1月～2016年2月とした。調査方法は、小中学校の学校長に調査の概要を文書および口頭で説明をし、調査票をクラス担任から配布し、無記名留置での回収を行った。調査内容は属性と眠気、ライフスタイルおよび心理行動の行動とした。1日における多様な眠気の評価には、The Pediatric Daytime Sleepiness Scale (PDSS)を用いた。Adolescent Lifestyle Questionnaire (ALQ)によりライフスタイルを評価した。心理社会的行動とサポートのニーズについてはPediatrics Quality of Life Inventory (PedsQL) とMultidimensional Scale of Perceived Social Support (MSPSS)を用いて評価使用した。分析方法は、PDSSの結果を4分位にわけた眠気の強さとALQ、PedsQLおよびMSPSSとの関係を検討するために分散分析を行った。

【倫理的配慮】

本研究は、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

【結果】

調査票は、5校の小学校および4校の中学校に在籍する4,204名に配布して、1,928名(45.9%)より回収できた。PDSSを回答していたのは、1,716名(40.8%)であった。PDSSの中央値は16.0点であった。眠気の強さ4区分の分布は、0～10点が20.5%、11～15点が26.4%、16～19点が22.4%、20点以上が30.7%であった。眠気とALQとの関係では、眠気が強くなるほど生活上の問題を抱える割合が全体的に高かった。眠気とPedsQLとの関係では、眠気が強くなるほどQOLが低かった。眠気とMSPSSとの関係では、眠気が強くなるほど家族、友達、特定の誰かの3資源によるサポートが低い傾向にあった。

【考察】

思春期におけるこどもの眠気は、ライフスタイルおよび心理社会的行動との関係があり、とくに、眠気が強い思春期のこどもはサポートが得られていない状況であった。こどものQOLにおいては、眠気に着目した支援が重要であると思われた。